武蔵野日曜聖書講筵

パウロのピリピ伝道
――使徒行伝第16章――

１９９１年10月13日
小池辰雄

テモテと云う弟子　マケドニヤ人の幻影　ピリピ伝道　パウロの投獄　十字架と聖霊を本式に受けとる　霊震　キリストを体で受けとれ　無即無限無量　神霊を止どめている霊止

【使徒16】

1 斯てパウロ、デルベとルステラとに到りたるに、視よ、彼処にテモテと云う弟子あり、その母は信者なるユダヤ人にて、父はギリシヤ人なり。2 彼はルステラ、イコニオムの兄弟たちの中に令聞（よききこえ）ある者なり。3 パウロかれの共に出立つことを欲したれば、その辺（あたり）に居るユダヤ人のために之に割礼を行えり、その父ギリシヤ人たるを凡ての人の知る故なり。4 斯て町々を経ゆきて、エルサレムに居る使徒・長老たちの定め規（のり）を守らせんとて、之を人々に授けたり。5 ここに諸教会はその信仰を堅うせられ、人員日毎にいや増せり。

6 彼らアジヤにて御言を語ることを聖霊に禁ぜられたれば、フルギヤ及びガラテヤの地を経ゆきて、7 ムシヤに近づき、ビテニヤに往かんと試みたれど、イエスの御霊、許し給わず、8 遂にムシヤを過ぎてトロアスに下れり。9 パウロ夜、幻影（まぼろし）を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。10 パウロこの幻影（まぼろし）を見たれば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣べ伝えしむる為に我らを召し給うことと思い定めて、直ちにマケドニヤに赴かんと為（せ）り。

11 さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、12 彼処よりピリピにゆく。ここはマケドニヤの中にて、この辺の第一の町にして殖民地なり、われら数日の間この町に留まる。13 安息日に町の門を出でて祈場（いのりば）あらんと思わるる河のほとりに往き、其処に坐して、集れる女たちに語りたれば、14 テアテラの町の紫布の商人（あきうど）にして神を敬うルデヤと云う女きき居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。15 彼は己も家族もバプテスマを受けてのち、我らに勧めて言う『なんじら我を主の信者なりとせば、我が家に来りて留まれ』斯（か）く強（し）いて我らを留めたり。

16 われら祈場に往く途中、卜筮をなし、其の主人らに多くの利を得さする
婢女、われらに遇う。17 彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『こ
の人たちは至高き神の僕にて汝らに救いの道を教うる者なり』18 幾日も斯く
するをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて
汝に、この女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり
19 然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるを見てパウロとシラ
スとを捕え、市場に曳きて司たちに往き、20 之を上役らに出して言う『この人々
はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、21 我らロマ人たる者の受くまじく、
行うまじき習慣を伝うるなり』22 群衆も齊しく起こり立ちたれば、上役ら命
じて其の衣を剥ぎ、かつ笞にて打たしむ。23 多く打ちてのち獄に入れ、獄守
に固く守るべきことを命ず。24 獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、
桎にてその足を締め置きたり。25 夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美
するを囚人ら聞きいたるに、26 俄に大いなる地震おこりて牢舎の基ふるい
動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。27 獄守、目
さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せん
としたるに、28 パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害うな、我ら皆ここ
に在り』29 獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に
平伏し、30 之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』
31 二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』32 斯て神
の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。33 この夜、即時に獄守か
れらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプ
テスマを受け、34 かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を
信じて喜べり。
35 夜明になりて上役らは警吏どもを遣して『かの人々を釈せ』と言わせた
れば、36 獄守これらの言をパウロに告げて言う『上役、人を遣して汝らを釈
さんとす。然れば今いでて安らかに往け』37 ここにパウロ警吏に言う『我ら
はロマ人たるに罪を定めずして公然に鞭ち、獄に投入れたり。然るに今ひそ
かに我らを出さんと為るか。然るべからず、彼等みずから来りて我らを連れ
出すべし』38 警吏これらの言を上役に告げたれば、其のロマ人たるを聞きて
懼れ、39 来り宥めて二人を連れ出し、かつ町を去らんことを請う。40 二人は獄
を出でてルデヤの家に入り、兄弟たちに逢い、勧をなして出で往けり。

●テモテと云う弟子

パウロの第二回伝道が、三回の伝道のうちで一番大事な伝道です。16章です。

1**斯てパウロ、デルベとルステラとに到りたるに、**
デルベとルステラと、前に伝道した所をまた尋ねた。随分、ここで迫害を受けたですよ。ヘタすると殺されそうになった所です。死にそうになった所、それをまたパウロは行ったわけだ、なお信仰を助けんがために。

視よ、彼処にテモテと云う弟子あり、
これが大事なんだ、テモテにでっくわしたことが。ルステラでもってテモテにでっくわした。

その母は信者なるユダヤ人にて、父はギリシヤ人なり。
お父さんの方は信仰がない。お母さんはユダヤ教的な信仰だったんだ。そういう混血児みたいですけれども。ユダヤ教とギリシヤと。ちょうど、パウロがユダヤ教とギリシヤ思想との両方とも持っているようなわけで、テモテというのは、生まれがそういうことなんだ。だから、彼は、テモテを

「自分の子」

とまで言ってしまったです、後の書簡を見ると。非常に信頼された師弟関係です。テサロニケ前後書、コリント後書にも出ていますが。

2**彼はルステラ、イコニオムの兄弟たちの中に令聞（よききこえ）ある者なり。**
もう既に、テモテは相当評判なわけだ。やり手なんだね。

3**パウロかれの共に出立つことを欲したれば、その辺（あたり）に居るユダヤ人のために之に割礼を行えり、**
というのは、ユダヤ人を躓かせないために、割礼を施した、というわけです。何も必要があるわけでない。パウロは、その時その時に示された事をするので、何も決まっているわけじゃない。

「割礼そのものは要らない」

と、パウロはもちろん言っている。これはユダヤ人を躓かせないためにやった。

その父ギリシヤ人たるを凡ての人の知る故なり。
異邦人は、もちろん割礼はしません。ギリシヤ人は異邦人の代表者です。

4**斯て町々を経ゆきて、エルサレムに居る使徒・長老たちの定め規（のり）を守らせんとて、之を人々に授けたり。**
外側は一応そうやっているけれども、中身は違うんです。

5**ここに諸教会はその信仰を堅うせられ、人員日毎にいや増せり。**
もちろん、福音を語っているわけです。それで、テモテは新しくパウロの福音を受けとることになる。

●マケドニヤ人の幻影

6**彼らアジヤにて御言を語ることを聖霊に禁ぜられたれば、**

これが面白いね。なお、パウロは小アジヤ半島で、エペソあたりまで行きたかったらしいところが、

「もういかん、それでもう後はよせ、この小アジヤ半島はよせと聖霊に禁ぜられた」

と面白いことが書いてある。

フルギヤ及びガラテヤの地を経ゆきて、7ムシヤに近づき、ビテニヤに往かんと試みたれど、イエスの御霊、許し給わず、8遂にムシヤを過ぎてトロアスに下れり。9パウロ夜、幻影（まぼろし）を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。

この「幻影（まぼろし）」というギリシヤ語は、「隠れたるものの顕れたるもの」という意味です。見えないものが現象したものが、この「幻影」です。だから、いわゆる、我々がちょっと幻というと、何か化（け）があるようなものにみえるよ。そうでなくて、はっきりと見えるようにされたもの、という意味なんです。これは、箴言29章18節に、

「黙示なければ民は放肆（ほしいまま）にす　律法を守るものは福（さいわい）なり」（箴言29・18）

とある。この

「黙示」

という字が、この「幻影」という字なんです。「黙示」という言葉は、「黙示録」の「黙示」も、

「顕現」

という意味なんだ。「黙示」でなくて、本当は

「顕示」

なんだ。あらわに示されたるもの、顕示録なんです。「黙示録」という訳が間違えたんです、「アポカリュプシス」というのは。

正に、ヨハネがパトモスで見せられたのは、全部これは幻影、顕示なんだ。昔から、もうアブラハムの時代からずっと、マリヤも見せられているんだからね。全部、夢でもって見せられる。天使が現れたりしてね。これはみんな大事なんだ。要するに神の示しなんだ。

「啓示」

なんです。目に見える啓示が、即ちこの「幻影」だ。私は夢でよくそいつを見る、不思議なのを。

マケドニヤ人が顕れて、

「我らを助けろ」

と言う。もうパウロははっきり、これはキリストに導かれているわけです。幻影を見ようが、天使が顕れようが。

10パウロこの幻影（まぼろし）を見たれば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣べ伝えしむる為に我らを召し給うことと思い定めて、直ちにマケドニヤに赴かんと為（せ）り。

これは、注解書がしょっちゅう書いているように、ここの10節から
「我ら」
という言葉が出てくる。ということは、ここではもうはっきりと、ルカが一緒にいたことが分かる。16章10節から17節まで「我ら」、それから、20章5節から15節、21章1節から17節、27章1節から28節までが「我ら」と書いてある。特に「我ら」と強く言っているのは、聞いた話でなくて、見たから、特に「我ら」と書いてある。

聖霊の見させているところの幻影です。

「これは聖霊によったものであるか、ないか」

は、もう直感できるです、それを体験したときに。悪霊もやるからね、悪い事を。

●ピリピ伝道

11 **さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、12 彼処よりピリピにゆく。ここはマケドニヤの中にて、この辺の第一の町にして殖民地なり、**

マケドニヤの王フィリッポス2世（アレクサンドロス大王の父）が自分の名前に従ってフィリッピ（ピリピ）と付けた所だそうです。

われら数日の間この町に留まる。13 安息日に町の門を出でて祈場（いのりば）あらんと思わるる河のほとりに往き、其処に坐して、集れる女たちに語りたれば、14 テアテラの町の紫布の商人（あきうど）にして神を敬うルデヤと云う女ききき居りしが、

「紫布」というのは上等な品なんです。「ルデヤ」というのは本当の発音は「リディヤ」(Lydia)です。ヨーロッパで最初の集まりは、河の辺における祈祷会だった。そして、最初に救われたのが、このルデヤという女性であった。

主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。

だから、すぐ受けとったですね、神の力で。これは、もちろんユダヤ教的なわけだった。

「神を敬う」

とは、旧約的な角度だった。それから、もう新約に移ってしまった。まぁ、旧約から新約に一番あざやかに変わったのはパウロですからね。しかし、今も、相変わらずユダヤ人は受けとらないわけだ。

「心」という字は「カルデヤ」という字を使ってある。普通の「心」という字です。

彼は己も家族もバプテスマを受けてのち、我らに勧めて言う『なんじら我を主の信者なりとせば、我が家に来りて留まれ』斯く強（し）いて我らを留めたり。

みんな救われちゃったな。み霊のバプテスマです、もちろん。

●パウロの投獄

16 **われら祈場に往く途中、卜筮をなし、其の主人らに多くの利を得さする婢女、われらに遇う。**

とんでもないやつにでっくわした。

17 **彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『この人たちは至高き神の僕にて汝らに救いの道を教うる者なり』**

そんなことを言う。悪霊という奴は、相手の本質はちょっと分かるとみえてね。

18 **幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり。**

昔ね、いろんなのがいたですよ。私もやったです。手島さんはもちろんやったけれども。

「御名によって出でよ！」

と言うと、出ていくんだ。バタンと倒れたりする。他の霊がついていると、祈りになると、狐みたいな口したり、妙なのがいたよ。蛇みたいに、舌をペロペロ出してみたり。この頃は、そういう方はここにいらっしゃいませんが。いろんな事があったですよ、正直。泡をふいたりね。

「イエス・キリストの名により、出でんと倒れたりする。他の霊がついていると、祈りになると、狐みたいな口したり、妙なのがいたよ。蛇みたいに、舌をペロペロ出してみたり。この頃は、そういう方はここにいらっしゃいませんが。いろんな事があったですよ、正直。泡をふいたりね。

「イエス・キリストの名により、汝にこの女より出でん事を命ず」

と、使徒行伝のこれを私たちはやったわけだ。ヘタすると他の人につくから、窓を開けて、そっちの方へ、外に出さないと。

19 **然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるを見てパウロとシラスとを捕え、市場に曳きて司たちに往き、20 之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、21 我らロマ人たる者の受くまじく、行うまじき習慣を伝うるなり』22 群衆も齊しく起こり立ちたれば、上役ら命じて其の衣を剥ぎ、かつ笞にて打たしむ。**

この笞には先に鉄片が付いていて、痛いんですよ。痛いどころでない、傷つくです。血が出る。あんまりやられると、死んでしまう。前に、あそこ（ルステラ）でもやられた。死にそうになった。

23 **多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。24 獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。25 夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、**

不思議な人たちだなぁと。やっつけられても、肉体は非常に傷められても、魂の世界は逆に力強くなっている。これが凄いんです。聖霊はいろんな事にでっくわせば逆に強く働きたもう。それだけの聖霊の力を受けとっていないとね。

「どうも運命環境がおかしくなると信仰が、聖霊がダメになる」

なんて、そんなのは本当の聖霊じゃない。人間的な頑張りよりか強いですからね、聖霊の

方が。「頑張れ」なんて、私には言わないでくださいよ。私は頑張りません、み霊の力が来たもうから。あなた方は、お互いにいわゆる頑張りはいらない。パウロやペテロがちゃんと証している。

26 **俄（にわか）に大いなる地震おこりて牢舎（ろうや）の基（もとい）ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。**

これは、使徒行伝12章でペテロがやっているんです、同じことを。ペテロもパウロも、聖霊の力を本当に受けているから、やっつけられると逆に強くなる。

●十字架と聖霊を本式に受けとる

キリストがその最大な方です。十字架に刺されて、十字架に懸けられて、釘で打たれて、槍で突かれて、もう血が流れてしまったから、最後にキリストは

「われ渇く」

と言われた。

「お前たちの為に、渇いたんだぞ」

ということです。

「この血を飲め、肉を食らえ」

と言う。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨ていたまいし」

これが、十字架上の一番強い言葉です。「なぜ、お捨てになったか」と。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書に出ているとおり、

「あなたに百%にお従いしてまいりました。そして、聖意を完全に成しました。その私をなぜ、お捨てになるか」

と。ということは、

「あなたの義は、このように証していたこの義人を、義を、あなたは捨てたもうか」

と。そういう反語なんです。

「天地を貫くところの神の義が倒れてたまるか」

と。「なんぞ、捨ていたまいし」というのは、

「あなたはお捨てになりません」

という、逆説的な言葉なんです。その義は必ず立つ、復活のキリストを通して。だから、

「彼らはかわいそうなご連中だ、赦してやってください」

と。義と愛がちゃんとその二つの言葉に出ている。

「彼らのために血を流して命を捨てる」

これが赦しなんだからね、キリストの赦しというのは。いわゆる

「大慈大悲」

ではないんだから。大変なゆるしです。だから、十字架の贖いを本当に受けたら、もう聖霊は来ざるを得ない。こないだ、

「十字架上の七言」（１９９１年10月10日、ヨハネ伝19章、裾野キリスト召団ルデヤ会にて）を話したときに、私は本当に平伏して話した。解説なんかできることではないんです、この十字架の世界は。

「自分はその赦しにあずかった人間だ」

と。どんな人でもゆるせるんです、この赦しにあずかった人は。人を赦すことのできないのは、本当に十字架を受けとっていない。また、その赦しを受けとらない人は十字架を受けとらない。いつまでも、人間的な

「どうだ、こうだ」

なんて言っているうちはダメなんです、そういう本当の現実に入らないと。

もう入ったら、福音の世界は、十字架と聖霊を本式に受けとれば天下無敵でね、現実が違うんです。地上にありながら、そこはもう天国的現実ですから。何がどうなったって、一向差し支えない。これを本当に受けとっている人は少ないんだからね、クリスチャンなんていったって。だから、キルケゴールが、

「本当のクリスチャンは天才よりか少ない」

と言ったのはそのことだ。誰でもが、天才より少ないクリスチャンになれるのに、その最後の次元まで来ないんだよ、みんな。手前でおしまい。

内村先生や藤井先生を、私は批判はしないけれども、残念ながら使徒たちの次元からはズレていた。もし使徒の次元に本当に入っていたら、内村鑑三はあんなものじゃない――「あんなもの」なんて言ったら悪いけれども――大変なひとだけれどもね、内村先生は。明治・大正の日本の精神界では、何といったって、内村鑑三は第一人者でしょう。

その点では、賀川豊彦の方が、ある意味では上だね。あの人は聖霊のひとです。どん底を歩いたひと。まぁ、人はそれぞれの使命を持っているんだから、比較はしない方がいい。

使徒行伝は、繰り返し読みなさいよ。「読む」ということは、その現実に一緒に入るということです。

●霊震

「俄に大いなる地震おこりて」

と――ペテロは12章で、パウロはこの16章で――これは霊震ですよ、地震なんて書いてあるけれども。はっきり言います、私は。これは霊震なんです。霊震が地震を起こしただけのはなし。だから、単なる地震じゃないんだよ。単なる地震で、こんな事が起きやしない。牢屋の基（もとい）が震い動いて、戸がたちどころに開いてしまって、囚人が解放されてしまったなんて。

27 **獄守（ひとやもり）、目さめ獄（ひとや）の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、**

責任があるからね。殺されるんです、その責任上。だから、自分で死んだ方がましだというわけだ。

28 **パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害（そこな）うな、我ら皆ここに在り』**

み霊の権威はこんなもんです。

29 **獄守、燈火（ともしび）を求め、駆け入りて戦（おのの）きつつパウロとシラスとの前に平伏し、**

30 **之を連れ出して言う『君等（きみたち）よ、われ救われん為に何をなすべきか』**

もう、参ってしまった。福音の世界は、参らなければ、その世界に入れない。

「分かるの、分からないの」

ではない。降参しなければ、福音書のキリストに降参しないうちは、絶対に入れない。いくら研究会をやって、いくら祈祷会をやってもダメなんだ、降参しなければ。

楽しいでしょ、あなた方、福音というのは。はげしい楽しさなんだ。こんな集会は、お説教なんかしているんじゃないから。

「パウロと一緒にその現実に入りましょう」

という集会だから。

松代に大本営を築こうとした。あそこは地盤の、岩盤の非常に硬い所で、これなら大丈夫と。ところが、後で地震が何回も起きた。私は知っている。あれは霊震です。意味は言いません。日本の陸軍が間違ったことをした。天皇陛下はそういう事を知らないんだよな。今の天皇陛下も、もっとしっかり聖書でも読んで、

「私はもうキリスト教だ」

くらいのことを言わなくては。

それはもう、「ペレストロイカ」（再構築、改革）を起こさなければ、ダメなんです、日本の政治家も。ゴルバチョフは自分の身体の中にペレストロイカが起きたから、それが外に現れて、ドイツの鉄のカーテンが切れてしまった。そういうもんですよ。マルチン・ルターの宗教改革も、彼自身がペレストロイカを起こしたから、宗教改革になった。人ひとりの魂が本当にひっくり返れば、パウロがその最たるもの、運命環境ではないんだよ。

●キリストを体で受けとれ

獄守はパウロとシラスの前に平伏してしまった。

31 **二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』**

「信ぜよ」ということは、

「受けとれ」

ということ。

「神さまの子であることを信ずる」のではない。

「キリストを受けとりなさい」ということ。私はある病人に書いた。

「あなたは心配は要らんよ。寝る時には、キリストの御腕を枕にしたつもりで寝なさい。」

と。相手はクリスチャンじゃなんだよ。はっきり言うんだ、僕は。もう今は、水割ったり、遠慮することはない。本当のことをはっきり言った方がいい。それは聖霊の権威の言葉だから、それに逆らえば、相手がダメになる。従えば、相手は力がつく。聖霊の世界は審判であると共に恵みであるんです。

「キリストを受けとれ、体（からだ）で受けとれ」

と。私が訳せば、もうこれは

「体で受けとれ」

くらいのことを書くね、「信ぜよ」なんて書かないで。「信ぜよ」という言葉は躓きになるから。

「キリストを体で受けとれ」

と。「救われる」ということは本当に、

「キリストの生命の世界に入る」

ということなんだ。

「めでたし、めでたし」

なんていうんじゃない。

32斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。33この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、34かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。

素晴らしいね、これ、アーメン、ハレルヤだ。私が画家ならば、こういう所を描きたいけれどもね。

35夜明になりて上役らは警吏（けいり）どもを遣して『かの人々を釈（ゆる）せ』と言わせたれば、

何を言ってるんだ、今ごろ。

36獄守（ひとやもり）これらの言をパウロに告げて言う『上役、人を遣して汝らを釈さんとす。

ゆるすもゆるさないもない。

「我々は間違った」

と、まず言えばいいんだ。間違ったと言わないで、「ゆるす」だなんて、相変わらず威張りくさっている。

然れば今いでて安らかに往け』

言われなくたって、安らかに行くよ。

37**ここにパウロ警吏に言う『我らはロマ人たるに罪を定めずして公然に鞭ち、獄に投入れたり。然るに今ひそかに我らを出さんと為るか。然るべからず、彼等みずから来りて我らを連れ出すべし』**38**警吏これらの言を上役に告げたれば、其のロマ人たるを聞きて懼れ、**39**来り宥めて二人を連れ出し、かつ町を去らんことを請う。**40**二人は獄を出でてルデヤの家に入り、兄弟たちに逢い、勧をなして出で往けり。**

素晴らしいね、この16章は。こんな卜筮がいたんで、なおさら、この福音の世界のもの凄さが示されたようなもんだ。卜筮がいなければ、こういう事は起きなかった。何が現れても逆に、この福音は、み霊の世界は顕然と現れる。

もう行き詰まりを知らんですよ。いいですか。とにかく、キリストの直弟子の、ペテロ、パウロ、ヨハネ、彼らの次元にいよいよ質的に同じものになって進んで行くだけのはなし。

●無即無限無量

こないだ、私は大事なことを言いましたね。

「父の全きが如く全かれ」

と、キリストがおっしゃったけれども、「全さ」というものは、もし、

「これで全し」

といって、ひとつの完了になる、そういう「全さ」なら、それはダメだと。キリストは、そういう意味でおっしゃったとは思いませんけれども。

「無限」

がいいんです、無限無量が。だから、私は、

「無即無限無量」

と言っているので、「無即全」とは言わない。「全的」ということは、言葉の一番深い意味では、「無限無量的」ということなんです。ひとつの限界を決めて、

「これが全きものである」

と言ったら、ダメなんです、そういう「全さ」は。無限界なんです。無限無量なるものを中に宿す。「キリストを宿す」ことは

「無限無量を宿す」

こと。「聖霊を宿す」ことは無限無量を宿すこと。限りない世界です。

「永遠の生命」

というでしょ。「全き生命」と言わない。「永遠」というのは限りがない
「無量」
ということ。
「無」
という字は素晴らしいんだ。数えられないこと、「無数」というでしょ。面白いね、数が無いと書く。無数ということは、数えられない、無限ということ。限りきわまり無し、という。
「無限」
もそうでしょ。限界が無いということ。無量、量りしれられ無いということ。「虚無」の無じゃないですから、この「無」は。表現できない。
「雄弁は銀にして、沈黙は金なり」
というのは、
「語り表現できない世界だ」
ということ。表現すると、限定になってしまう。表現するとズレてしまう。だから、聖書の御言も、それが文字にとらわれたらダメだ。パウロが、
「儀文は殺し、霊は活かす」
と言ったのは、「霊で読め」ということ。
「言葉の背後の言葉は、神の根源語は無限無量なものを持っているぞ、ギリシヤ語でもヘブライ語でもないぞ」
と。
「ギリシヤ語やヘブライ語ができれば聖書がよく分かる」
なんて、そうじゃない。もちろん、ギリシヤ語やヘブライ語を勉強することは悪くはない。悪くはないけれども、ギリシヤ語の奥の
「神の根源語の響きを本当に受けとっているか」
ということ。ルターは、
「聖書は全き本ではない、かけらだ」
と言った。
「聖書はかけらだ、瓦のかけらみたいなものだ」
と。ルターというのは面白いことを言うやつだ。
「神の言葉は盛りきれないんだ、かけらだ」
と。しかも、神の言葉は世の終りにいたるまで、新しく一人一人を通して働いていく。だから、
「汝らはキリストの文なり」
という。生活そのものが、本当の言でなくてはいかん、神の言でなくては。言は現に通ずる。言葉は現れる。現実の現。うつつ。

「初めに言あり。終りに言あり。」
と言ったっていいんです。霊言。うつつなんだ。
「過去・現在・未来」
といって、時称は三つあるというけれども、本当は現在だけなんだ。現在において、過去が引き上げられ、未来が引き寄せられる。その現在は「永遠の現在」です。信仰の世界は「現」の世界、「うつつ」の世界。
「今日、いま、ここにおいて」
という世界。だから、毎日毎日がはちきれそうなんだ。行き詰まりを知らない。

●神霊を止どめている霊止

いいね。しかし、そういう気合を受けとっていなんだ、普通は。牧師さんの話を聞いていると、眠くなったり、くたびれたり。塚本先生も、話をすると後は疲れてしまって、
「月曜はもぬけのからだ」
と言ったが、そうじゃないよ。話をすれば、逆に力が来てしょうがないんだ、私は。
「お疲れさま」
なんて、ちっても疲れません、冗談言うなと。私にうっかり「お疲れさま」なんて言ったらダメだよ。これ、本当なんだから。
「どうして私はこんなことになっちゃったか」
と、自分でも不思議でしょうがない。
「徴と不思議」と、よく書いてあるね、パウロは。自分自身が「不思議」であり、自分自身が「徴」である。
「我はキリストの徴なり」
と。その点では、
「我を見よ」
と、はっきり言えるんです。私は、
「人間小池を見るな」
と言っているけれども、そうじゃない。本当の意味では、
「私を見なければダメだよ、私の中に活きているものが見えるか」
と。外側の私はみんなと同じで、目が二つ、耳が二つ、鼻は一つだけれども。
話はズレるけれども、世界中の政治家もそれぞれの国のイデオロギーはいいよ、それぞれで。しかし、みんな限界がある。イデオロギーの限界を越えて本当の人間の世界に入れ。そうしたら、本当の握手ができる。本当の人間というのは、「ひと」というのは「霊が止どまる」と書く。神霊を止どめている霊止（ひと）になったら、
「イデオロギーはそれぞれの限界でそれぞれの善さを持っているが、それに固執す

るな、乗り越えろ」

と。それを言っているのがゲーテです。

「イズムの中にいるうちはダメだ、イズムを乗り越えろ」

と。ゲーテは本当の「メンシュ」「人間」というところをやっぱり見ている。本当のひとはみんなそうですよ。根底において、本当に霊止にならなければ、何をやったってダメなんだ。本当の霊止というのは、

「**神さまの相（すがた）に即して造られた**」。

「似姿」ではないよ、「即して」造られた。その即して造られたのが、「パラダイス・ロスト」（楽園喪失）になったのを、またひっくり返して新しい新人にしてくださったのが、キリストなんだから。キリストにあっては、我々は神に即したる本質を持っている、いただいている。ただ、

「罪びと、罪びと」

なんて言っているんじゃない。そういう、もの凄い逆説的な真理が、なかなかつかめないんだ。頭でわかろうとするから、いつまでたっても掴めない。いわゆる理解じゃないんだ。体感していかなければダメ。身体（からだ）で感じていかないと。

だから、この使徒行伝なんかを読んでも、楽しくてしょうがない。み霊はかくの如くして、パウロを力づけて進んでいく。さんざん艱難にあって、もう普通なら死んでいるひとだよ、このパウロという霊止は。ところが、死なないんだよ、彼は。使命の終わるまで。終わったと思ったら、今度は、パウロの手紙は――何も新約聖書を作ろうと思わなくても――手紙が今度は、新約聖書になってしまって、限りなく進んでゆく。

世界にどんなに本があっても、聖書一巻にはかなわない。仏教には深淵な哲理はあるでしょう。けれども、聖書にはかなわん。哲理の世界じゃないんだ。特に新約聖書はマタイ伝から黙示録まで、ひとつも無駄がない。この新約聖書というのは、不思議なもんだよ。全部、聖霊で貫いているからね。余計なことを言ってない。

まぁ、キリストを除いては、パウロは大変な霊止だね。福音書を書かせられたご連中も本当にみ霊で書いている。だから、

「み霊をいただかないで、聖書が読めるか」

というわけだ。私は阿蘇でもって神さまにひっくり返されてから、帰りの汽車の中で聖書を見たら、聖書のベールが取れていた。

「なるほど聖霊を受けなければ聖書は読めない本だ」

ということがはっきり分かった。帰りの汽車の中は楽しかったね。

では、今日はそこまでとします。